

## 物語性文様について 2

小 野 正 文

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| 1. はじめに     | 5. 抽象文の面貌         |
| 2. 抽象文とは    | 6. 抽象文と他のモチーフとの関係 |
| 3. 抽象文土器の発生 | 7. まとめ            |
| 4. 面貌の種類    |                   |

### 1 はじめに

物語性文様の中では抽象文は得意な存在である。釈迦堂遺跡群の野呂原地区で、本来ミミズク（双環装飾）が付くべきところに乳頭面が施される土器（第1図2以下1-2と表記）があった。発掘当初から芸術的に優れた土器であったので、数多く紹介されてきたが、筆者はその文様の謎を記憶に長く留めていた。そして、数年前に上の原下割遺跡の抽象文土器（1-1）を偶然の機会に観察した。抽象文土器の面貌の部分はいがいのC V面とここでは呼んでいるC字かV字状であることが多いのに、何と丸い乳頭面が施されていたのである。

また、人面装飾付土器と呼ばれる土器群とそれに類するかつてミミズク把手付土器と呼ばれた双環（双眼）装飾付土器があり、人面や双環などさまざまな面貌が展開していることが判明してきた。そして、抽象文には人面は付かないが、双環などの面貌が展開していることが明らかとなってきた。

ところで、縄文土器の図像学的研究の嚆矢の一つは、江上波夫の研究であると思われる。氏はその中で、次のように記述されている。

第一 その意匠は単独に、他と無関係に創造されたというより、勝坂式系土器を特徴づけた彫塑的、直・曲線的な装飾意匠によって暗示され、触発されたと見得る場合が多い。

第二に、そこで暗示され、触発された動物の種類は、以外に限定されていて、蛇や蛙や、またそれらと何らかの関係をもつたと思われるもの—例えば顔面把手の場合—が最も普通で、これに反して鹿や野猪や魚など狩猟、漁撈の好目標たる動物は全く含まれていないということである。

現在の研究ではこの見解をそのままとはできないが、「勝坂式系土器を特徴づけた彫塑的、直・曲線的な装飾意匠によって暗示され、触発されたと見得る場合が多い。」という点を考えてみたいと思う。

### 2 抽象文とは

抽象文は当初の定義では様々な文様を含んでいたが、現在はサンショウウオ状の文様にほぼ限定されている。ここでは懸垂された半月形の胴部を持つ文様を抽象文として取り扱う。文様研究で抽象文の各部分について適当な呼び名がないので、ここでは仮に各部分に名称を与えて論を進めたい。（2）

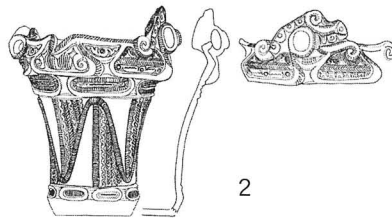
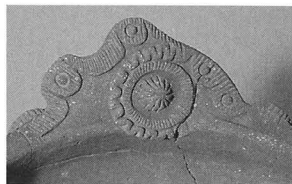
半月形の体部を隆帯で懸垂することを原則としているようである。双環装飾ないし環装飾を加えるもの、X字状の隆帯で表現するもの、楕円文などの隆帯と一体化しているものなどがある。特にX字状のものをX字状懸垂鉤いい、I状のものをI状懸垂鉤ということにする。

この懸垂鉤の付く部分と抽象文の境界が、厳然と区分されていると思われるので、この部分を境界という。

体部は半月形を中空隆帯表現から隆線まで変化が激しい。先端部としたのは、面貌が表現されず、単なる半月形であるものもある。腹尾としたものは半月形胴部の下にあるものである。腹尾は半月形胴部の下にまく尾であるが、先端部がヘビの頭のようなものから、面貌のC V面のようなものまである。巻き方も先端の方へまく前巻きと尾の方へ巻く後巻きがある。あるいは全くないものもある。背鰭はほとんど表現されないが、時折施文されるものもあり、他の楕円文などと融合しているものもある。尾は巻き上がりと下がりがあり、面貌が表現され両頭ではないかと思われるものもある。時には輪面と見間違ふようなものまである。

### 3 抽象文土器の発生

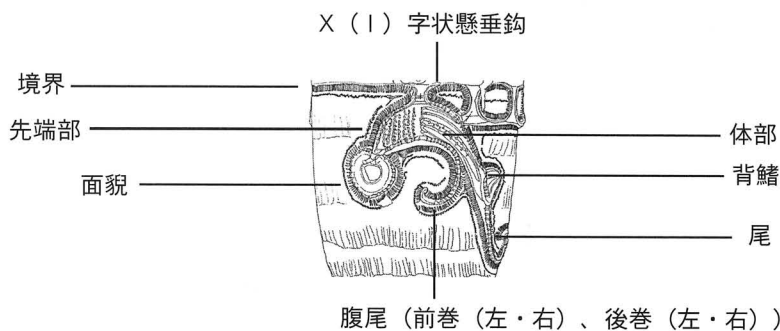
抽象文の起源はすでに今福利恵が指摘している。五領ヶ台式土器の中にその萌芽が見られ、猪沢式土器の中にその原型が作られ、新道式で成立し、藤内式ではほぼ終焉を迎え、井戸尻式ではその残影が見られるのみである。古くは三上徹也がその変遷を辿っている。釈迦堂遺跡博物館の特別展で猪股喜彦がいくつかの分析を行っている。最近の山梨県内の出土量の多さから、櫛原功一が全資料



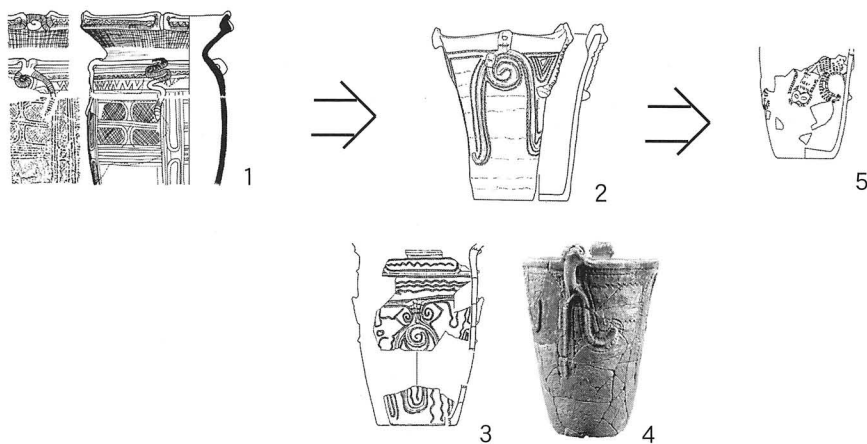
抽象文の乳頭面

把手の乳頭面

第1図 抽象文と把手の面貌（約1/13）



第2図 抽象文の部分名称（仮称）



第3図 抽象文の発生（約1/13）

まとめている。やはり北巨摩郡地域に多く見られる。

大石遺跡の五領ヶ台式土器（3-1）の胴部の小さな懸垂状の文様見られる。これには面貌は見られないが、V字状の粘土紐によって懸垂された一方が渦巻き、一方が垂れ下がる粘土紐である。次に梨久保遺跡の貉沢式土器（3-2）のI字状懸垂文に引き継がれるものと思われる。この土器は粘土紐の輪積痕を残した器面に、口縁部から懸垂鈎状の粘土紐があり、そこに逆U字状の粘土紐が垂れ下がるのである。垂れ下がった粘土紐の両端はやや上がる。しかし、面貌が付くことはない。また、中央部に渦巻状の文様が貼付され、端は蛇頭を思わせるようである。ここに抽象文の基本的モチーフは出来上がったと見なすことができる。また、寺所遺跡の土器（3-4）の獣面を思わせる突起から垂れ下がる隆帯も関係ありそうである。神谷原遺跡の土器（3-3）は胴部にや

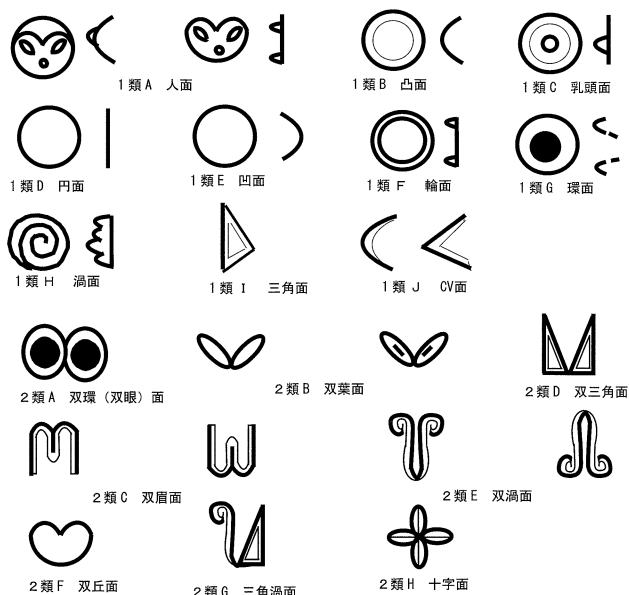
はり懸垂された粘土紐を持つもので、中央の渦巻いた隆線は梨久保遺跡例に類似する。

つまり、口縁部以下の器面に、懸垂鈎があり、そこから垂れ下がる逆U字状隆線が基本となると思われる。

#### 4 面貌の種類

長野県九兵衛尾根遺跡の人面装飾付土器は、人面装飾から伸びる両腕が湾曲して、一方の腕先の手の部分が蛇頭となるものである。この蛇頭の手を持つ人面装飾を捜すと、人面ばかりでなく、凸面、円面、乳頭面にもこのモチーフが展開していることが判明してきた。そこで、人面、凸面、円面、乳頭面など様々な面貌を分析することが必要となり、次のように分類している。（4）

1類と2類に大別する。1類は単独のもの、2類は対で表現されるものである。1類Aは人面である。多くは



第4図 面貌模式図

半球状の曲面に目鼻口が表現される。また、ハート形の平面に目鼻口が表現されるものがある。1類Bは半球状で目鼻口が表現されないものである。A類とB類の中間的表現のものもあり、面貌の一部が表現されるものもある。1類Cは乳頭状の凸起であり、しばしば沈線が施される。B類とC類の判別が困難なものもあるが、B類は中空である場合が多く、C類は中実で沈線をもつものがある。C類はB類に比べて小ぶりである。1類Dは凹面で土器の立体的に表現されることがなく、しばしば沈線で区画される。ただし、低隆帯の場合は区分が難しい。1類Eは凹面で円形の窪みをいう。1類Fは輪面といい、粘土紐で輪状を表現する。1類Gは環面といい、2類Aの一部を表現したように立体的である。1類Hは渦巻状をなすものである。1類Iは三角面で抽象文土器を扱う上で分類した。三角形の底辺が前方に、頂点が抽象文の先端部側に施文される。1類JはCV面とした。抽象文土器に一般的な面貌で、口を開いた動物のイメージを与える。C面とV面をあえて区分する必要はないと考え、同類をまとめてある。

2類Aはかつてミミズクと呼ばれていたものである。いくつかの場面に登場する。縄文中期の土器には一般的な装飾である。2類Bは双葉面とした。多用な表現があり、他のものと組み合わせるものもある。2類Cは双眉面とした。M字状やW字状をなすものも多く、単なる粘土紐の装飾と見誤るものもある。小林公明のいう眉月に当たるものである。2類Eも縄文土器には時代を越えて表現されるものである。2類Fはハート形である。これに2類Bが加わって人面になることもある。2類は同じものが相似形に並ぶものであるが、2類GはD類とE類の組合せである。2類Hは相似形が左右と上下に表現されたものである。

ここに分類したものすべてが抽象文土器の面貌に表現されるものではないが、人面を除いた大方のものが、面貌として採用されている。

## 5 抽象文土器の面貌

### 双環面、環面

双環面は、釈迦堂S-IVSB-53(5-1)、後田原遺跡(5-2)、石原田北遺跡(5-3)、梨ノ木遺跡(5-4)、鋳物師屋遺跡などに例がある。石原田北遺跡では反対側の面に双環装飾に円文が付き、蛙と思われ、抽象文と蛙文が付く数少ない例である。石原田北遺跡例は明確な懸垂鍵がないが、文様帯を区分する境界と環装飾は存在する。後田原遺跡と梨ノ木遺跡例は腹尾がない。

双環にならない環面は寺所遺跡(5-5)と大石遺跡(5-6)にあり、よく類似しており、先の尖った環面と丸い環面が対をなしている。何れもI字状の懸垂鉤に懸垂されている。(5-4)は懸垂鉤の部分に環状装飾が施されている。

### 環面、輪面

環面と輪面は区分が難しいところがあるが、大石遺跡(5-7)高畑遺跡(5-8)は立体的な環面で双環の面影を残している。しかも凹面装飾付土器である。(5-9)は懸垂鍵の部分に環状装飾をつけている。(5-8)は抽象文の文様部品をすべて備えためずらしい土器である。(5-9)は輪面と言ってもよいものである。これは懸垂鉤の部分に双環装飾を付け、背鰭と文様が一体化している。

酒呑場遺跡(5-10)は双環装飾把手の体部に一つの抽象文が付くもので、肝心の面部が失われているが、恐らく双環面か環面であろう。I字状懸垂鍵は抽象文とは反対側に付いている。抽象文は面貌をはじめとする文様構成部品が分離して施される。この独特な施文構成は抽象文を特徴付けるものである。

### 輪面、凹面

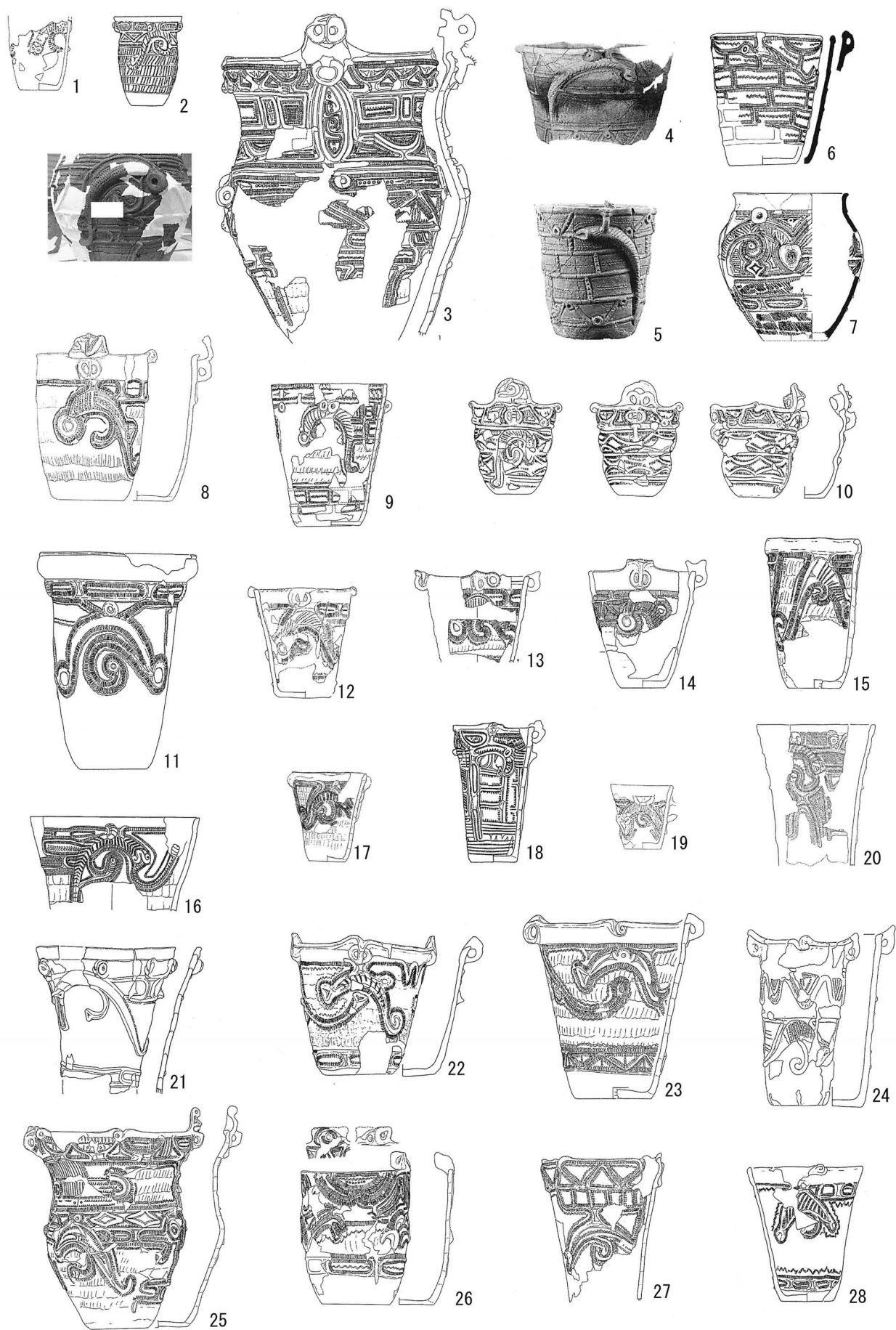
柳田遺跡(5-11)は大型土器である。懸垂鉤がV字状をなし、真中に環状装飾を施している。また腹尾が面貌の部分から伸びる新しい様相を見せている。高山遺跡(5-12)、神谷原遺跡(5-13)などが類する。石之坪遺跡(5-14、15)は凹面と呼んでいいもので、面貌が平面的に表現される。

### 乳頭面

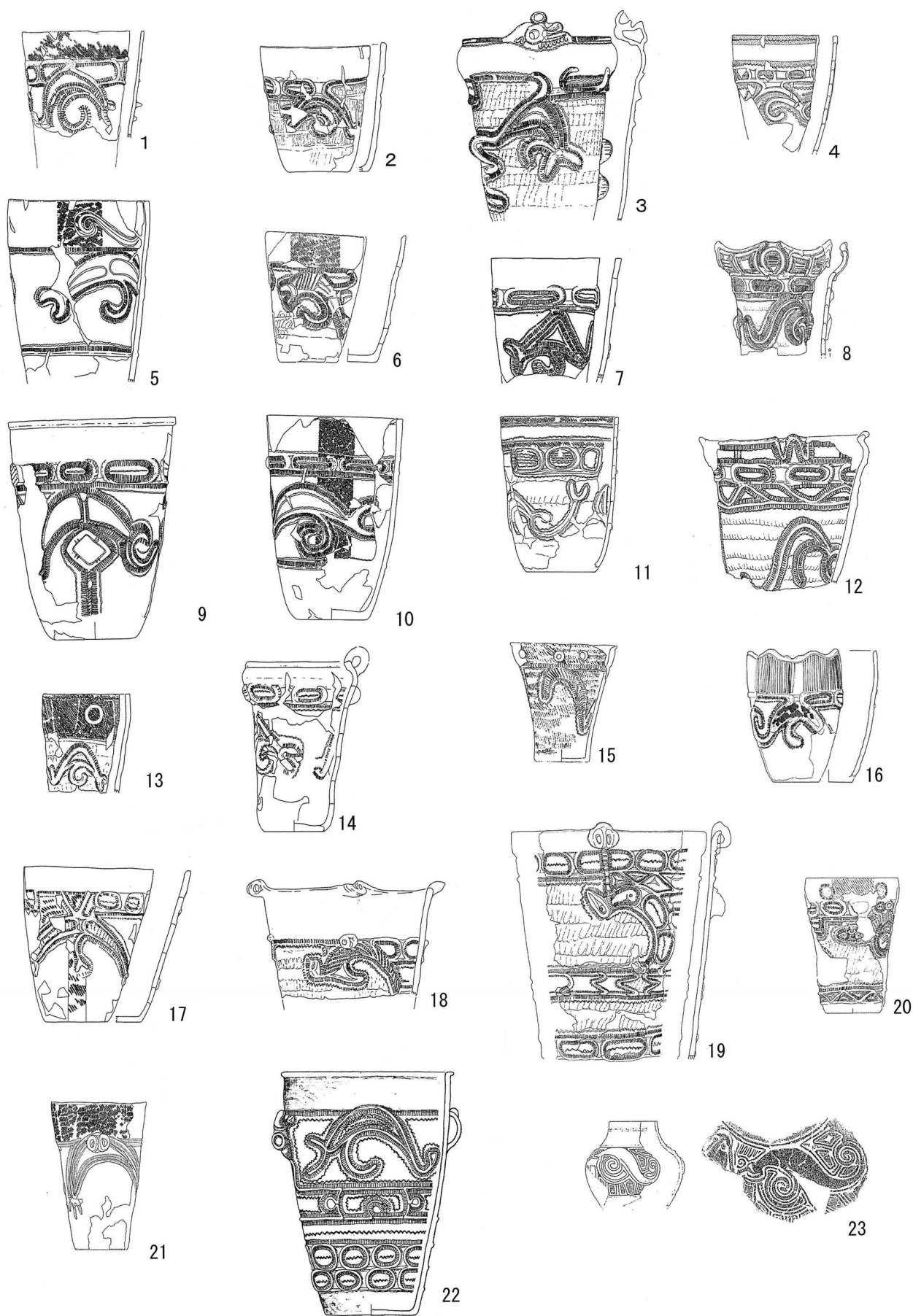
上の原下割遺跡(1-1)が好例であり、類例が知らない。乳頭に沈線を施している。

### 双渦面

双渦面は五領ヶ台式土器の口辺部に施文され以降、しばしば復活する。棚畑遺跡(5-16)に双渦面が施された点は大きな驚きであった。逆位の双渦面である。石之坪遺跡(東地区)(5-17)は、文様が展開するため実測



第5図 抽象文土器1 (約1/13)



第6図 抽象文土器2 (約1/13)

図には表現されていないが長い頸に粘土紐の瘤を二つ持ちながら、面貌は口辺部下線の境界を乗り越え、口辺部までせり上って、双渦面を施している。これも類例が少ない。

### 双三角面、三角面

桂野遺跡（5-20）は、全体像は不明だが立体的な細身の体部をもつことから古手の抽象文である。多摩NTNo.72（5-21）は体部の途中に面貌を付けたようである。いずれも、双三角面である。

三角面の初源的なものは高畑遺跡（5-18）である。抽象文土器から除外されることもあるが、I状懸垂鍵があること、半月形の体部であることから、抽象文とした。三角形の面貌が底辺を前方に頂点を体部側に貼付することも原則に忠実である。高畑遺跡（5-19）は三角面の横にさらに装飾を施している。懸垂鉤の部分に欠損はしているが、双環装飾が付くのであろう。

石之坪遺跡（東地区）（5-22）と酒呑場遺跡（5-23）は瓜二つの三角面を持つ。石之坪遺跡例は、裏側の抽象文は輪面で三角面と対となった抽象文である。（5-23）は尾も三角面で両頭のようなのである。海道前C遺跡（5-24）は三角面がCV面に变化してゆく過度的な様相を示している。三角形の底辺部分が低くなることによって、CV面に近づいている。問題はこの抽象文の腹尾は、体部から少し離れている。体部の一部が膨らみ乳房のようになり、そこに腹尾を近づいているような授乳の状態を表している。よく観察すれば、腹尾の根本に浅い沈線があり、口のようなのである。まさに哺乳類をイメージして造形されている。

### CV面

石原田北遺跡（5-25）は凹面装飾付土器の大型品である。懸垂鍵に一部が残り、環状装飾を施している。背鰭は楕円帯と一体化している。無面としたいが、頸部にC字状の隆帯がある点が注目される。これは、CV面が分離して施文されたものと解することができる。酒呑場遺跡（5-10）はI字形懸垂鉤が抽象文とは反対側に分離して施文される点と同じ発想である。石之坪遺跡（5-26）は境界がないめずらしい抽象文である。こちらは双環装飾付土器である。

石原田北遺跡（5-27）はX字状懸垂鉤が明瞭であるが、尾の状況が不明である。石之坪遺跡（5-28）は懸垂鉤の部分に環状装飾を施している。尾の部分がはっきりしないが、両頭である可能性もある。酒呑場遺跡（6-1）は尾が三角形となっているが、面貌の三角形とは明らかに違う。鋳物師屋遺跡（6-2）は面貌と尾の部分が一部欠損しているが、背鰭を除くすべての部品が揃っている。大木戸遺跡（6-3）は双環装飾付土器の体部に抽象文が2匹展開するもので、腹尾は腹からではなく頭部から出て新しい傾向を示している。ここでも（5-

26）と同じように双環装飾付土器の体部に抽象文が施文される。多摩NTNo.72（6-4）は体部が一本の隆帯となり、（6-3）で見たように、腹尾が面貌から飛び出すものが出てくる。

柳田遺跡（6-5）、古林遺跡（6-6）、下原遺跡（6-7）、多摩NTNo.72（6-8）、釈迦堂（6-9）では境界に抽象文の体部が接して、かろうじて懸垂された残影を残している。柳田遺跡（6-10）、高畑遺跡（6-11）、高畑遺跡（6-12、13）、釈迦堂（6-14）では境界から抽象文が分離独立している。

### 無面

桂野平石遺跡（6-15）は体部のみである。吉田向井遺跡（6-16）などがある。これらは、面貌が別に施文される訳でもない。ここが抽象文の本質を現しているのであって、面貌を必ずしも必要としないのである。

両頭面は釈迦堂遺跡（6-17）などにある。腹尾は前巻きと後巻きがあるので、まったくどちらが頭か不明である。

### その他不明な面

原町農業高校前遺跡（6-18）と比丘尼原遺跡（6-19）は鳥の嘴のような頭部を上にしたものである。（6-18）は懸垂部分に双様の装飾を施し、（6-19）は口縁部の双環装飾から垂れ下がる懸垂隆線が、抽象文の先端部まで垂れ下がって、面貌には目玉も表現され異様である。多摩NTNo.72（6-20）は楕円形の先端部に隆線で三角文を4つ貼付する。三角面や双三角面とは、まったく別なもので類例がない。比丘尼原遺跡（6-21）は三本指のような面貌で伊那市北丘遺跡にも類例があるようだが、ここでは面貌としての分類する段階まで至っていない。

## 6 抽象文と他のモチーフとの相関関係

筆者はすでに抽象文は人面装飾付土器には施されることはなく、双環装飾付土器に施文されることを指摘した。石原田北遺跡（5-10）、石之坪遺跡（5-26）、大木戸遺跡（6-3）などに例がある。また石原田北遺跡の凹面装飾付土器（5-25）、高畑遺跡（5-8）にも抽象文は施されている。

時期的には重複がほとんどないこともあって、釣手土器に施されることはないのである。他のモチーフとの関係でいえば、曾利遺跡（6-22）、丸山南遺跡（6-23）、石原田北遺跡（5-3）に見られるように蛙と組み合わせられることはあっても、他の猪や蛇と組み合わせられることはないのである。

奇妙なことに、ヘビがカエルを捕食することはよく知られており、当然縄文人も先刻承知であったにも関わらず、三角頭の蛇が蛙を捕食している図像はないのである。弥生時代の銅鐸には蛙を追う蛇がわずかながら描かれる

のと大きな違いである。

動物学的にはカエルをよく捕食するヘビはヤマカガシであるので、ヤマカガシのイメージがこの抽象文には投影されているのかもしれない。

## 7 まとめ

抽象文土器はその発生時に懸垂されるという基本原則もやがては忘れられ、半月形の体部も一本の湾曲した隆線と化していく、原則をなくしたところで消滅の方向へと進んでゆくと思われる。しかしながら、土器の口縁部より上には施文されることはなく、ましてや、把手として土器の口縁部以上に突出することはなかったのである。

また、人面とはまったく相容れない関係にあり、人面装飾付土器には抽象文が施されることはなく、凹面装飾付土器や双環装飾付土器に抽象文は施される。

抽象文は口縁部以下のここである境界以下に施文されることから、地上下の動物あるいは水棲動物に関する縄文人のさまざまなイメージが重なったものであり、もちろん面貌も環面、輪面、円面、三角面、C V面、双環（双眼）面、双三角面などと多様であり、時期的にも変化し、半月形の胴体を離れて施文されることもあるのである。このように多様な表現は、具体的な動物を表現したものというより、物語上の動物である可能性が高い。

蛇を捕食する図像はヤマカガシをイメージさせるが、海道前C遺跡（5-24）は明らかに乳房があり、腹尾ではなく仔抽象文が乳をせがんでいるようである。これは哺乳類をイメージしたものであると思われる。

ここでは、面貌の展開について考えてきたが、一種の動物にいくつもの面貌があること事態は、様々なイメージが重なっていることを現している。図像では猪のモチーフがしばしば人面や環面に表現されることがある。また、半人半蛙のように両者のイメージが重なったものもあるが、抽象文のように面貌の変化の著しいものはない。

筆者はかつて、縄文時代は架空の動物を想像する文化段階にはないという見解のもと、抽象文が蛙を捕食する特性とサンショウウオは夜行性であり、縄文時代といえども八ヶ岳を中心と地域には棲息していなかった可能性から、抽象文をヘビの一種とした。しかしながら、抽象文の属性を分析してみると、ヘビの一種とする考えのほうが無理であるという結論に至った。

「ミズチ」という呼称は言い得て妙であるが、「ミズチ」は古代の想像上の動物であるので点で躊躇してしまう。

抽象文の面貌の展開の中で、抽象文は彫塑的、直・曲線的な装飾意匠から触発された想像上の動物と思われる。物語性文様には人面、蛇、猪のように具体的イメージから造形されたものと、抽象文のように装飾意匠から触発されて造形されたものの2系統があるように思える。蛙はこの両者から造形された可能性がある。

## 参考文献

- 江上波夫 1964 「勝坂式系土器の動物意匠について」『國華72-6』
- 釈迦堂遺跡博物館 2001 『抽象文土器の世界』
- 小林公明 1981 「一本足の龍」『山麓考古』
- 櫛原功一 2001 「縄文中期集落の変遷と土器様相」『石原田北遺跡』
- 三上徹也 1986 「中部・西関東における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」『長野県考古学会誌』51
- 藤森栄一 1965 『井戸尻』
- 田中 基 1982 「メデューサ型ランプと世界変換」『山麓考古』15
- 小野正文 2005 「蛇頭の腕をもつ人面装飾付土器について」25-39頁『長沢宏昌氏退職記念考古学論攷集』
- 小野正文 2008 「物語性文様について」『縄文土器総覧』
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器様式」『縄文土器総覧』



番号	著者・編集者	発行年	書名	シリーズ	備考
1	藤森栄一編	1965	『井戸尻』		中央公論美術出版
2	岡谷市	1973	『岡谷市史』		
3	長野県教育委員会	1975	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』茅野市・原村その1・富士見町その2		
4	富士見町教育委員会	1978	『曾利』		
5	甲斐丘陵考古学研究会	1979	『御坂町の埋蔵文化財』		
6	八王子市櫛田遺跡調査会	1982	『神谷原遺跡』		
7	岡谷市教育委員会	1985	『梨久保遺跡』		
8	茅野市教育委員会	1986	『茅野市史』		
9	茅野市教育委員会	1986	『高風呂遺跡』		
10	山梨県教育委員会	1986	『釈迦堂Ⅰ』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書17	
11	山梨県教育委員会	1987	『釈迦堂Ⅱ』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書21	
12	山梨県教育委員会	1987	『釈迦堂Ⅲ』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書22	
13	櫛形町教育委員会	1987	『メ木遺跡』		
14	山梨県教育委員会	1987	『上の平遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書29	
15	山梨県教育委員会	1987	『清里の森第1遺跡範囲確認調査報告書』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書32	
16	長野県教育委員会	1988	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』塩尻市内その1		
17	韭崎市教育委員会	1989	『後田遺跡』		
18	茅野市教育委員会	1990	『棚畑』		
19	相模原市当麻下溝遺跡調査会	1992	『神奈川県相模原市下原遺跡』		
20	国立市教育委員会	1994	『南養寺遺跡Ⅷ区』		
21	櫛形町教育委員会	1994	『鋳物師屋遺跡』	櫛形町文化財調査報告No.12	
22	国分寺市遺跡調査会	1996	『恋ヶ窪遺跡調査報告書Ⅶ』		
23	岡谷市教育委員会	1996	『花上寺』		
24	山梨県教育委員会	1996	『上野原遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書122	
25	山梨県教育委員会	1996	『甲ッ原遺跡Ⅱ』第3次第4次	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書114	
26	塩山市	1998	『塩山市史 史料編 1巻』		
27	須玉町	1998	『須玉町史史料編第1巻考古・古代・中世』		
28	上野原遺跡調査団	1998	『上野原遺跡発掘調査報告書』		
29	山梨県教育委員会	1998	『矢坪遺跡・談合坂遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書151	
30	東京都埋蔵文化財センター	1999	『多摩ニュータウンNo.72・795・796遺跡』	東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集	
31	石之坪遺跡発掘調査会	2000	『石之坪遺跡(東地区)』		
32	横浜市教育委員会	2001	『前高山遺跡・前高山北遺跡』	港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告書	
33	大泉村歴史民俗資料館・大泉村教育委員会	2001	『遠い記憶Ⅰ』		
34	石原田北遺跡発掘調査団	2001	『石原田北遺跡』		
35	韭崎市教育委員会	2001	『石之坪遺跡(西地区)』		
36	山梨県教育委員会	2001	『古堰遺跡・海道前C遺跡・大林上遺跡・大林遺跡・宮の前遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書165	
37	山梨県教育委員会	2001	『上の原下割遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書186	
38	大泉村教育委員会	2002	『古林遺跡』		
39	山梨県教育委員会	2003	『大木戸遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書205	
40	茅野市教育委員会	2003	『梨ノ木遺跡』		
41	横浜市教育委員会	2004	『高山遺跡』	港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告書35	
42	御坂町教育委員会	2004	『桂野遺跡』		
43	山梨県教育委員会	2004	『酒呑場遺跡』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書216	
44	山梨文化財研究所	2005	『高畑遺跡』		
45	山梨県教育委員会	2005	『原町農業高校前遺跡第2次』	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書231	
46	原村教育委員会	2006	『比丘尼原遺跡』		
47	小林宏和	1987	「縄文時代の土壌について」『研究紀要4』		山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
48	国立歴史民俗博物館	1996	『動物とのつきあい』		



図	No.	都県	遺跡名	遺構	報告書図版	文献	備考
1	1	山梨県	上の原下割遺跡	22号土坑	第31図24	37	
1	2	山梨県	釈迦堂	S-V 4号住	第17図1	12	
3	1	長野県	大石遺跡	1号住	第108図8	3	
3	2	長野県	梨久保遺跡	14号住	第45図	7	
3	3	東京都	神谷原遺跡	SB178	第242図8	6	
3	4	山梨県	寺所第2遺跡		30-1	33	
5	1	山梨県	釈迦堂S-IV	S-IVSB-53	第371図	11	
5	2	長野県	後田原遺跡		図13-9	2	
5	3	山梨県	石原田北遺跡	20号竪穴	第82図	34	
5	4	長野県	梨ノ木遺跡	86住炉体	第98図3	40	
5	5	山梨県	寺所第2遺跡			33	
5	6	長野県	大石遺跡	21住	第179図3	3	
5	7	長野県	大石遺跡	土壙839	第248図12	3	
5	8	山梨県	高畑遺跡	5号竪穴	第37図23	44	
5	9	山梨県	石原田北遺跡	35号竪穴	第136図49	34	
5	10	山梨県	酒呑場遺跡	79住	第31図10	43	
5	11	山梨県	柳田遺跡	10号土器	第46図6	26	
5	12	神奈川県	高山遺跡	69号住	第107図1	41	
5	13	東京都	神谷原遺跡	SB66	第158図1	6	
5	14	山梨県	原町農業高校前遺跡	22号住	第158図6	45	
5	15	山梨県	石之坪遺跡(西地区)	41住	第112図8	35	
5	16	長野県	棚畑遺跡	137号住	第401図1	18	
5	17	山梨県	石之坪遺跡(西地区)	42号住	第118図46	35	
5	18	山梨県	高畑遺跡	5号竪穴	第38図31	44	
5	19	山梨県	石原田北遺跡	35号竪穴	第136図51	34	
5	20	山梨県	桂野遺跡	33号住	第115図	42	
5	21	東京都	多摩NTNo.72	住居	第98図	30	
5	22	山梨県	酒呑場遺跡	12号住6	第19図6	43	
5	23	山梨県	石之坪遺跡(東地区)	4号住	第73図1	31	
5	24	山梨県	海道前C遺跡	4号住	第145図10	36	
5	25	山梨県	石之坪遺跡(東地区)	7号住	第79図1	31	
5	26	山梨県	石之坪遺跡(東地区)	7号住	第80図1	31	
5	27	山梨県	石原田北遺跡	35号竪穴	第133図22	34	
5	28	山梨県	原町農業高校前遺跡	22号住	第158図5	45	
6	1	山梨県	酒呑場遺跡	土坑	第41図4	43	
6	2	山梨県	鋳物師屋遺跡	83号住	第37図1	21	
6	3	山梨県	大木戸遺跡	8号土坑	第87図4	39	
6	4	東京都	多摩NTNo.72	遺構外	第272図1	30	
6	5	山梨県	柳田遺跡	土坑	第50図30	26	
6	6	山梨県	古林遺跡	92号土坑	第244図0021	38	
6	7	神奈川県	下原遺跡	35号住	第35図1	19	
6	8	東京都	多摩NTNo.72	住居址	第73図1	30	
6	9	山梨県	釈迦堂	S-I 土坑	第215図36	10	
6	10	山梨県	柳田遺跡	2号土器	第45図2	26	
6	11	山梨県	高畑遺跡	11号竪穴	第62図2	44	
6	12	東京都	神谷原遺跡	SB55	第155図1	6	
6	13	山梨県	原町農業高校前遺跡	5号住	第131図3	45	
6	14	山梨県	釈迦堂	S-IVSB-32	第381図	11	
6	15	山梨県	桂野平石遺跡	住居址	第10図1	5	
6	16	長野県	吉田向井遺跡	1号住	図5-7	16	
6	17	山梨県	釈迦堂	S-III SB-95	第100図50	11	
6	18	山梨県	原町農業高校前遺跡	5号住	第131図1	45	
6	19	長野県	比丘尼原遺跡	小竪穴1002	第120図223	46	
6	20	東京都	多摩NTNo.72	住居址	第12図5	30	
6	21	長野県	比丘尼原遺跡	10号竪穴	第56図5	46	
6	22	長野県	曾利遺跡	54・76住	第114図124	4	
6	23	長野県	丸山南遺跡				